



一般社団法人東京都医療ソーシャルワーカー協会

No.62 2025.3

つ た え る

TSUTAERU

心をつたえる…様子をつたえる…事実をつたえる…

手立てをつたえる…気持ちを伝える

## 目次

- [\[1\]2024年度災害支援対策委員会](#)
- [\[2\]珠洲市は遠かったけど](#)
- [\[3\]点から線へ ～東京 DWAT 災害派遣を通じて～](#)
- [\[4\]珠洲×わたし](#)
- [\[5\]能登半島地震 いしかわ総合スポーツセンター 1.5次避難所 活動報告](#)
- [\[6\]ワークショップ「かたりば」に参加して](#)
- [\[7\]編集後記](#)
- [\[8\]能登半島地震現地支援 派遣協力都協会員](#)
- [\[9\]災害支援対策委員会 募集案内](#)

# [1] 2024年度災害支援対策委員会

康明会病院 富士川泰裕

今年度は、能登半島地震への災害支援の1年でした。

2024年2月1.5次避難所支援から始まり東京DWA T支援、珠洲市支援、その報告の各ブロック勉強会に講師として災害支援対策委員が参画いたしました。

私事ですが、1,5次避難所に同じチームだった医療ソーシャルワーカーと大分大会で再会し、三重県大会で再会を約束しました。他県のソーシャルワーカーとの繋がりも強く感じました。

災害は起きて欲しくないですが必ずどこかで起きます。その日のために、我々医療ソーシャルワーカーには力が必要です。日々の実践と向きあうことで災害が起きてても時も我々の力が発揮できると感じました。災害支援をすることで、新しい出会いという最高の副産物を得ることが出来ました。

今年度は東京MSW協会の広報誌「東京MSW」に掲載した災害支援の記事を特集にしました。どれも充実した内容になっておりますので、是非ご覧ください。

## [2] 珠洲は遠かったけど…

### (災害支援対策委員会 能登半島地震 災害支援報告)

自宅会員 武山 ゆかり

3月1日、早朝6時過ぎ、冷たい雨だけど沢山着込んで汗ばみながら金沢駅西口7番臨時特急乗り場で、野口会長、笹岡前災害統括部長とおち合い7:00発のバスを待ちました。

話しかけた80才過ぎという元気なお母さんは、金沢に居る息子が借りてくれたアパート住まい、90才になる夫は発災後体調を崩し金沢で入院中、珠洲の家に残る息子が心配で、度々5時間かけて珠洲の市役所前までバスの後歩いて自宅へ帰るとのこと。「病院と自宅と仮住まいの3カ所を行ったり来たりで、もう疲れちゃったわ〜!」と笑います。

羽咋市付近では工事用車両やコンビニ配送の車に挟まれて渋滞、30分遅れ。穴水ドライブインでトイレ休憩。ここはキレイで手洗いは温水がうれしい。穴水神社の鳥居が崩れ痛ましい。里山空港を経て山道の所どころ両脇の崩れや未知のひび割れて何カ所か片道通行。でも雨の中補修工事の若い人たちの姿が続き、日々走りやすい道に甦っていくことが分かる。有難くて涙が出る。寒いだろうなあ、と。

遅れを15分取り戻し市役所前で会長一行は下車、私は終点の「すずなり道の駅」まで。待合室は

開いていたが、営業は停止中。トイレはテープで閉鎖され、横駐車場の一角に3基(?)横にはポリタンク、自洗トイレということらしい。



仮設トイレ

駐車場の白テントはレッドクロスのマーク。一時、道の駅は避難所になっていたとか。今は支援団体の基地でもあるようで、屈強そうな若者や福岡県歯科医師会の移動診療車が止まっていた。水こそ出ないが、自販機は営業中。水もコインで500mlずつは買える。あったかいコーヒーも。水さえくれば営業再開出来るの?いや、それでもなさそう、裏のマンホール付近は液状化の影響で下水の蓋が盛り上がり亀裂もそこここに。



ぺしゃんこの家、「危険」の赤い張り紙の家。傾いた電柱、道路の亀裂…。

雨が強いので、待合室で早めの昼食は金沢の老舗ジャーマンベーカリーのサンドイッチとペットボトルの「加賀棒茶」。たくさんの観光パンフレットが寂しく並ぶ、寒くて薄暗い待合室だけど、いつか観



光客でにぎわう日が来ることを祈ります。

雨も小やみになり、市役所に戻りながら街の被害を撮影し、協会と珠洲に行きたがっていた仲間に送りました。主にトイレの写真になってしまいましたが、ふつう通り営業しているファミマと、道路入り口で液状化で盛り上がったマンホールが邪魔している写真はまさに今の珠洲の姿。(現在、上水は復旧しつつあるが排水の問題が大きく立ち塞がっている)

次いで支援を予定している「健康増進センター」へ。DMAT、DWAT等が拠点として、2階で宿泊もしている施設だが、ここもまだ水は来ておらず、駐車場には兵庫県南あわじ市からのトイレカーが。



屋内ではポリ袋をかけたトイレで対応。支援者の休む2階の部屋はリノリウムの床にマットレスが1人1枚その上に各自が持参の寝袋、一人用テントを張る方も。職員や保健師さんも避難所から通勤とのこと、疲れが見えます。車中泊のDrもいると。



金沢市の1.5次避難所には県のリストに「珠洲市から来た」という方がたくさんいます。「水が通れ

ば帰りたい」という思いは強いですが、水だけでなく、介護支援や施設、病院職員の帰還や受入れ調整も、実現には必要になります。送り出す側と、迎える側、どちらにも、私たちの仕事が役に立つと思われま。今は金沢だけですが、4月からは珠洲にもMSWの拠点が必要になり常駐の予定。

DWATで東京から輪島に入る予定の方もいます。全国のMSWが少しずつ力を出し合って、この危機を乗り越えられるといいですね。待っています。

金沢への帰り道、穴水駅までは石川県協会の会長、副会長の慣れた運転で山道を送っていただき、穴水からはのと鉄道代行バスで「のと中島」まで、時間待ちしてのと鉄道七尾でJRに乗り換え、行きと同じ5時間近くかけ金沢駅に帰り着きました。やはり、能登半島先端の珠洲市は遠かったですが、観光で行くときは「のと里山空港」もありたくさん魅力がある地、輪島や能登島の復興も願っています。また、きっと来るからね。

2024. 3. 1

参考資料:能登観光ポータルサイト「のとねっと」「ぶらり能登」アクセス・詳細マップ付

東京都MSW協会では、金沢市に日本協会経由で2月に3名が支援活動に参加、4月に3名が参加を予定しており、輪島市には東京DWAT経由で3月に3名が参加、4月に1名が参加を予定しています。(2024年3月時点) 今回の東京MSWは研修にスポットを当てて、参加した方の感想をまとめました。当協会では、新人研修、グループスーパービジョン、スーパーバイザー養成講座など経験年数に応じた研修を行っています。

興味を持った方は、是非ご参加ください。(東京都MSW協会のホームページから申し込みができます。)

## [3] 点から線へ ～東京DWAT災害派遣を通じて～

河北リハビリテーション病院 山野 晶

東京DWAT(東京都災害派遣福祉チーム:Disaster Welfare Assistance Team)は、東京都が組織化している災害時の福祉支援チームで、専門的な資格や職業を持つメンバーによって構成され、2024年4月時点で134名が登録されています。

能登半島地震が発生し、東京DWATが発足して初めての派遣となりました。3月から開始され、私は第3クール(3/8~3/13)で参加しました。1クール4~5名で、第3クールは男女2名ずつ4名、社会福祉士・精神保健福祉士、領域は子ども、思春期、知的障害で、医療領域は私一人でした。全日、高岡市の宿泊先から、二時間半かけて一般道を通り、一般避難所の門前中学校に通いました。



門前中学校

ちょうど卒業式が行われ、春休みに入る時期でしたが、中学校と避難所が背中合わせでした。主な業務としては、①避難者の福祉・介護ニーズのヒアリング、他団体への引継ぎ、血圧測定、体調把握。②避難者の滞在箇所と名前のマッチングとマッピング③孤独死防止に向け、避難者との対話から長期的ニーズのヒアリング④炊き出しやイベント案内、避難生活上の困りごとを伺い、管理者へつなぐ。⑤DVT予防、コミュニケーションの場としての健康体操の実施⑥段ボールベッドの入れ替え⑦輪島市(岡山県DWAT)・石川県DWAT(全社協代表)との情報共有でした。



段ボールベッド

2月まで福井県DWATが滞在し、相談ブースの設置などで基盤を作り、東京DWAT第1、第2クルーが①②③⑤を広げ、第3クルーでは終結に向けて②③④を加速して取り組むことが求められました。門前中学校の特徴としては約170名が滞在する中、地区ごとに居住スペースが分かれ、コミュニティが確立されていました。



### 段ボールハウス

各班長が滞在者の方を把握し、情報共有や高齢者のケアも分担していました。若年者や就労者も多く、日中は自宅の片づけを含め、外出される方が多くいました。そのため、避難所内における孤独死のリスクは低いと感じました。そして、退所後は地区ごとに仮設住宅で生活したいという声が多く聞かれました。

派遣後、報告会がありました。全体としては第7クールまでとなり、門前中学校は第4クールで終了、以降は区民・保健センターでの支援になりました。避難所ごとに運営母体や避難者の特徴が異なり、フェーズによって求められることが変わることを知りました。しかし、どのクールも避難所の力量を踏まえ、避難者に寄り添い、丁寧に関わってきたことが伝わりました。その積み重ねが信頼と安心につながり、「福祉の人」として輪島市の方に刻まれていくと思います。今回は避難所内での支援でしたが、避難所で生活できない方へのアプローチや、中長期的な視点として、仮設住宅への移行後の不安に対するケアへの意見が挙がっていました。領域、職種も多様な中、初めての出会いでも、同じ目的と支援への気持ちから、チームワークの高さがあり、各クールの支援が点から線につながっていると感じました。メンバーとの出会いは、専門職としてとても心強い存在に広がりました。しかし、東京DWATとしてはスタートにすぎません。この経験を踏まえ、未来に備え取り組み続けていきたいと思います。

## [4] 珠洲×わたし

康明会病院 四條 裕

海と空がつながり青くなっていた。

なぜなら、今まで家が建っていて見えなかった海が家屋の崩壊により、普段より見えるようになった。海が1番魅力的になる8月にさらに海が近くなっているのが、皮肉にも珠州市である。





私が石川県珠洲市への派遣に行きたいと思った理由は、東日本大震災で支援者として関われなかったこと、報道がどこまで事実を伝えているのか信じきれていない自分がいたからだ。実際に自分の目で見たいという想いをずっと抱えていた。ただ、職場の理解がないと5日間の休みを取るの  
は難しいと諦めていた。転職になったのは上司が1.5次避難所いしかわ総合スポーツセンターに災害支援に行ったことだ。

上司が誘ってきた立ち飲み屋で1.5次避難所の災害支援を熱く話すのだ。その姿に心誘われ、勢いで日本協会珠洲市災害派遣登録をスマホでその場で行った。上司も上機嫌だったので難なく休みを確保した。

東京から金沢まで新幹線で2時間半。金沢駅から珠洲市役所までバスで3時間。前日は金沢に前乗りして朝7時のバスで珠洲市に向かった。



犬吠埼灯台



支援内容はフェーズにより変わっているようで、私が体験したメインは、全戸訪問だ。支援初日から5日間私の気持ちは実習生、もしくは新人時代の感覚だ。

何をどうして良いかわからない。50歳手前の自分としては、「初心を忘るべからず」という言葉が身に染みた。心強かったのが、日本協会職員の福井さんが現地責任者にいたことだ。

福井さんは石巻の支援にずっと関わっており頼もしい現地責任者だった。

また、石川県協会の中本会長も自分の時間を使い珠洲市に支援にきていること、地元の人の被災者にとっても安心する材料だろう。

2024年1月の都協会災害支援研修会で学んだ鉄則は、「被災地で求められていることをする」この言葉をお守りに珠洲市支援に挑んだ。

全戸訪問は、二人でペアになり回っていく。相棒は、地元の保健師、石川県協会、私はドライバーをしながら、アセスメントは現地に滞在している方をメインにして私はサブにまわったが、珠洲市の現状を知ることが出来た。

1万人の都市のせい、地元保健師の底力か、コミュニティが出来上がっており、地元の保健師はみんな親戚的感覚があり、名前を言えば繋がるようだった。訪問の際、ピンポンは意味がない、中庭まで行って、「こんにちは!」と叫ぶのだ。

親戚感覚を醸し出して要支援者をあぶり出した印象だった。9割の家屋が全壊・半壊しており、修復が進んでいないと感じた。このような状況でいつ頃復興するのか疑問に思った。

仮設住宅についてだが、学校の校庭、駐車場、一番驚いたのは港だ。建てられる土地がなくしかたなく少ない土地を見つけて建てるのだ。



港の場合は、また津波が起きた時はどうなるのかと疑問に思うのは私だけであろうか。現地支援者から聞いた話だが、せっかく入った仮設住宅は、狭くて出てしまうという。以前の住居は広く、仮

設は東京のアパートのように狭いのでギャップで耐えきれないのだろう。

また、半壊状態の住宅でも自分の家に住み続けている高齢者も多い。家を直すだけの貯蓄もなく、あったとしても後先短い自分に使うのがもったいないという気持ちがあるので、ライフラインが整いつつある現在、他に行く必要がないと考えているようだ。

珠洲市災害派遣に行つて悲惨な状況は報道のままであり、自分が行くことで我がことと感ぜられた。

今、能登半島地震から約8か月経ち、報道が少なく、国民の意識が薄くなつてゐることが寂しい。研修で学んだこと。「今珠洲市に求められていることをする」を考えた。答えは都協会の会員に自分が見たものを発信すること。機会を与えてくれた都協会に感謝したい。

都協会会員の皆さんには、自分の目で見感ぜて欲しい。

ソーシャルワーカーとして今何ができるのか。

## [5] 能登半島地震 いしかわ総合スポーツセンター

### 1.5次避難所 活動報告

自宅会員 平林 朋子

2024年1月1日に発生した能登半島地震では、金沢市内やその他近隣地域の2次避難所（主としてホテルや旅館などの民間宿泊施設）へ入所するため一時的な待機場所として金沢市内に「いしかわ総合スポーツセンター」に1.5次避難所が設置されました。

日本協会と石川県協会はこの「いしかわ総合スポーツセンター」に主として入所者の退所支援のため医療ソーシャルワーカーの派遣事業を行つてゐます（日本協会の人的派遣は7月26日で終了）。

私は4月中旬、5月下旬、6月中旬、7月初旬、7月下旬の5回支援に入りました。「いしかわ総合スポーツセンター」には当初2カ所の避難スペースがあり「メインアリーナ」には避難所内での生活は自立しているが、何らかの社会的・医療的問題の為に2次避難所での生活は難しいという方が多く、「サブアリーナ」には介護を必要としている要介護・要支援者が生活してらっしゃいました。

4月中旬の時期は入所者100名程度で、最終の7月下旬には30名を切つてゐました。

当初MSWは「サブアリーナ」の退所支援を担当し、1日4～5名の石川県協会・日本協会のMSWが交代で支援に入つておりました。5月下旬には「サブアリーナ」の要支援・介護者の方々の多くは退所先施設が決定しており、6月中旬に参加した段階では、すでに「サブアリーナ」入所者は7名程度、「メインアリーナ」40名程度となり、MSWの援助も「メインアリーナ」の方々が中心になってきました。「メインアリーナ」の方々の状況は、ご自宅のライフラインの復旧待ち、仮設住宅待ち、又は他の公営住宅への入居待ち等です。そのため、支援は在宅調整が主となります。しかし金沢と能登は遠

く、困難も多い状態での支援でした。石川県は9月いっぱいですべての避難所の閉鎖を決定しています。避難所から次の生活場所に移ったとしても、まだまだ援助の手が必要と感じています。この支援を通じて感じたことは、避難所の生活から日常に戻る為の支援プロセスは、我々MSWの業務の構造と同じだということです。日常の生活を変えてしまう何か(病気・地震)によって引き起こされた問題に対し、日常の生活の場と異なる場所(病院・避難所)で、将来の生活を考えながら次の場所(施設・自宅・その他)を考えていくという構造が同じなのです。災害支援というイメージが湧きにくいですが、日常業務の延長と考えれば参加のハードルも下がるかと思います。次は無い方が良いのですが、もし何かあった時には難しく考えず、参加して頂ければと思います。

## [6] ワークショップ「かたりば」に参加して

東京都社会福祉協議会 高橋 和希

11月29日、都協会・災害支援対策委員会が主催するワークショップ「かたりば」に参加させていただきました。私は、東京都から委託を受け東社協が事務局を担う「東京都災害福祉広域支援ネットワーク推進事業」を担当しており、昨年の能登半島地震では東京DWAT(東京都災害派遣福祉チーム)の派遣に事務局として携わりました。今回のワークショップは、「災害支援についてざっくばらんに語り合おう」という企画でしたが、都協会にご協力いただいている東京DWATの事例報告も含まれていたため、事務局である私にもお声がけをいただき、皆さんの輪に加わらせていただくことになりました。

「かたりば」に参加されていたのは12名。全員MSWという中、ひとりマイノリティだった私を皆さん温かく迎え入れてくださり、リラックスした雰囲気の中、まずは自己紹介から始まりました。災害支援の経験は皆さんバラバラでしたが、「困っている人のために少しでも力になれることはないか…」という福祉スピリットを全員に感じ、まさに同じ志を持つ“同志”だと思いました。

中盤からは、ミドリ安全株式会社さんから提供いただいたという災害用保存食を食べながら、東京DWATとして石川県輪島市内の一般避難所へ派遣された方からの事例報告をお聞きしました。



現地の様子やDWATに求められたこと、そして初対面の人とチームを組み、どのように活動を展開していったか、とてもわかりやすくご報告されていました。DWATは平成30年に厚労省から出されたガイドラインに基づき各都道府県で組織化が進み、令和6年能登半島地震で初めて47都道府県すべてのチームが活動を行いました。東京DWATも令和5年度から本格始動したばかりで、まだまだチーム力向上のための課題は山積しています。そんな中、チーム員が自主的にDWATの役割やDWATの今後について話す姿は、事務局としても大変心強いものでした。皆さんの福祉スピリットに応え、事務局としてチームの発展に尽力しなければと、私の決意も新たになりました。

そして終盤は、参加者それぞれの思いや経験を共有しました。ひとつ印象的だったのは、東日本大震災で地元が被災したという参加者のお話です。彼女の地元は、原発事故の影響で全町避難を余儀なくされ、一度は散り散りに地元を離れることとなったそうです。生まれ育った故郷を離れるのはどんなにつらかったらうと想像し難いものですが、彼女のご家族は、文字通り真っ暗になってしまった町に希望の灯をともすために、規制が緩和されると真っ先に故郷へ帰ったそうです。そうして少しずつ住民が戻り、今では震災前よりも商店街に活気があふれていると言います。被災地を支援するときに忘れてはいけないことは、やはり「被災者中心」で考え、被災地をエンパワメントする視点を持つことだと改めて感じました。

災害は起きないに越したことはありませんが、いつ起きてもおかしくないものでもあります。福祉職としてどう災害に向き合うか、これからもぜひ一緒に考えていきましょう。

## [7] 編集後記

康明会病院 富士川泰裕

私の趣味は休日のランニングです。

ランニングは、自分と向かい合う時間と季節の移り変わりや、建物も日々変わっていく景色を観察するのが好きだから、ずっと走っているのだと思います。

災害が起きる前の景色が、一瞬でなくなり、大好きな景色を失うということはその人にとって大きな悲しみになると感じています。

しかし、何も無いところから、立ち直る人々の力強さを感じるたび、人間は弱くないと思います。我々医療ソーシャルワーカーも人間の力を信じる専門職なのだと考えています。皆さんも、人の力を信じる災害支援を一緒に行いませんか？

いつでも災害支援対策委員を募集しておりますので、少しでも興味がある方はご参加お待ちしております。



## [8] 2024年2月から2025年3月

### 能登半島地震現地支援都派遣協力都協会員

2024年 現地派遣時系

中辻康博 豊島区医師会

いしかわ総合スポーツセンター 2月3日～6日 (日本協会)

武山ゆかり 自宅会員

いしかわ総合スポーツセンター現地責任者 2月17日～3月1日

5月2日～12日 (日本協会)

富士川泰裕 康明会病院

いしかわ総合スポーツセンター 2月22日～25日 (日本協会)

山野晶 河北リハビリテーション病院

輪島市門前中学校 3月8日～13日 (東京DWAT)

金山真子 東京医科大学八王子医療センター

輪島市ふれあい健康センター 3月16日～21日 (東京DWAT)

加藤淳 牧田リハビリテーション病院

輪島市諸岡公民館 3月20日～25日 (東京DWAT)

安仁屋衣子 厚生中央病院

いしかわ総合スポーツセンター 4月8日～13日 (日本協会)

平林朋子 介護老人保健施設ソピア御殿山 (現在自宅会員)

いしかわ総合スポーツセンター 4月12日～18日

5月26日～6月1日 12日～19日

7月1日～7日 21日～27日 (日本協会)

工藤麻希 佐々総合病院

いしかわ総合スポーツセンター 4月13日～17日 (日本協会)

ビンガム祥子 虎ノ門病院分院

いしかわ総合スポーツセンター 4月28日～5月2日 (日本協会)

伊藤正一 勇美記念財団

いしかわ総合スポーツセンター 5月23日～27日 (日本協会)

四條裕 康明会病院

珠洲市現地派遣 8月19日～23日 (日本協会)

各協会会員の所属先は活動当時のものです。

東京都医療ソーシャルワーカー協会



# 災害支援対策 委員募集!

「決して忘れないこと 伝えてゆくこと 続けてゆくこと」

災害支援対策委員会を発足し、災害支援、減災・防災対策を継続しています。今後も、1人でも多くの医療ソーシャルワーカーの力が必要となります。都協会の会員として一緒に災害支援について考えていきませんか？

## 募集対象

東京都医療ソーシャルワーカー協会会員

## 活動内容

委員会（2か月に1回程度）・研修会・交流会等委員で活動内容を企画・立案できます。

## 応募方法

下記のアドレスの件名に「災害支援対策委員会参加申込」として氏名・所属・連絡先を記入してメールしてください。

問い合わせ先：東京都医療ソーシャルワーカー協会

Mail : [tokyo-msw@tokyo-msw.com](mailto:tokyo-msw@tokyo-msw.com)